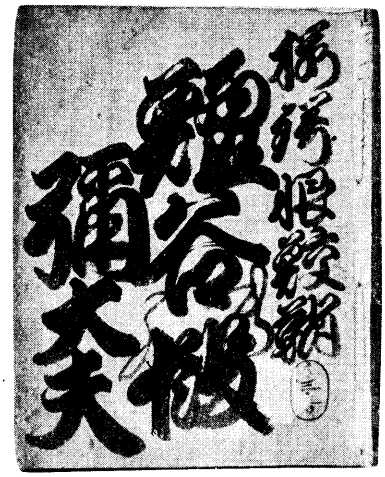
馬方彌太夫（四代目）

端塲專門の牛聲



四代彌太夫自筆鐵谷床本

◇

阿波の小松嶋から出て、大阪南堀江橘通高臺橋筋東に住む。始め淡路座で修業をして、大阪で長門の門に入つた。二段目物、端塲語りの名人で、此人の次に語る切塲の太夫は恐れを爲したといふ。千本櫻の椎の木が十八番で、簾内で語つてゐるのであるが、それでも、その次へ現はれる、すし屋の長門を喰つてしまつたといふ逸話がのこつてゐる。長門ほどの名人でさへこの通りだつた。

◇

この椎の木を語つた時、ちよつと待ち合はせの間に、傍らの人に彌太夫は『私の聲はなんと聞こえるか』と問ふて見た、すると其人は『牛のやうです』と即座に答へた。よつほど大きな聲だつたと見える。

◇

阿波の國に居た頃は馬方だつたといふ說がある。本人はさうとは云つてはゐなかつたが、世間では――馬方彌太夫――で通つてゐた。

◇

大丈夫切塲を語る腕前があるのに、わざと好んで端塲を語つたのは、役塲の善し惡しよりも已れの藝格といふものをちやんと心得てゐたのに違ひない。後に五代目彌太夫も好んで越路や其他の端塲を勤めたのも、一つは師匠四代目に私淑したものかも知れない。

◇

名人長門は時に氏太夫の道明寺に東天紅の端塲を語つたり、又長門が寺子屋だと氏太夫が寺入りを勤めたりするやうなことは其昔は

隨分遣つたものらしい、舞臺効果を揚げる爲めには、少しのこだわりもなく相談づくでやつたものだ、開けたものである。

◇

彌太夫は文化十一年生、明治元年三月十九日、五十五歳で死歿。

大兵大力の春太夫（五代目）

湯屋の三助から櫓下まで

◇

文化五年、堺の鍛冶屋町に生れ、明治十年七月二十五日、七十歳で死んだ、煙草庖丁鍛冶の子。若い時は角力が好きで、素人角力の大關にまでなつたことがある。

◇

二十一二歳の頃、大阪へ流れて來て、隨分身を持ち崩し、天滿の靈府の附近の湯屋の三助になつて稼いでゐるうち、暇をぬすんで好きな淨瑠璃を四代目氏太夫に敎はつた。たゞこれだけの經歷だが、これが後に淨瑠璃の大本山、天下の文樂座の櫓下の榮位に登らうとは……である。

◇

大まかなあの藝風はこの人の性格まる出しで、平生頗る大度量な洒落なところがあつて、始終、芝居の樂屋や表方の連中を大勢引連れて茶屋や料理屋へ押しかけた、本町橋のある料亭では、一時に百五十人前の鰻丼を注文されて面喰つたといふことだつた。

◇

春太夫の妻は梅園と號する畫家で、一方明淸樂の師匠をしてゐたやうな人だから馬鹿に氣位いの高い女で、常に『夫は藝人だが私は先生だ』と誇つてゐたので、春太夫は無條件に已れの妻を『先生々々』と呼んでゐた。